

連続的な授業観察から見出される授業構造の分析

An analysis of a class structure found by continuous observation of classes

岸 俊行 (Toshiyuki Kishi)

指導：野嶋 栄一郎

本論文は、現在、教育現場に生起している様々な問題を考える際に、その前段階として、今、初等教育の現場で何が行われているのかを明確にする必要があるという問題意識のもと、実際に小学校で行われている一斉授業を連続的に観察することによって、「授業という営み」を記述し、授業の構造を明らかにすることを目的とした。分析に際しては以下の2つの点を考慮した。一つには、授業を「教師と児童のコミュニケーションの連続体」として捉え、その教師と児童のコミュニケーションが、日常の営みと同様に、日々継続して行われているという視点にたって分析を行った。二つには、「授業を構成する構成員（教師・児童）の活動」と「その活動によって成立する授業という場」を分けて考えることにより、授業内での教師の活動を把握するとともに、授業という場そのものを鳥瞰的に把握することを試みた。

本論文は7章で構成されている。1章では研究の背景と分析のための視点について述べ、2章では従来の授業研究を、教師の教授行動という観点からまとめた。3章では本論文の目的と構成について述べた。

第4章では、授業中の教師と児童の言語的・非言語的行動を取り上げ、定量的に分析を行うことによって日々繰り返される授業の中での教師の行動の検討を行った。まず、授業中の教師・児童の発話に着目し、連続する授業間の相関分析を行い、さらに発話カテゴリーを基にしたクラスター分析を行っている。その結果、教師の日々の授業内発話の安定性を明らかにしたとともに、教師の教授スタイルが4つの群に分けられることを明らかにした。教師の授業内発話の高い安定性の一例として、あるクラスの連続する5日間の教師発話のカテゴリー相関を示す (Table1)。さらに授業中の教師の児童への指名行動に着目し、相関分析を行った結果、教師の指名行動にも教師の発話と同様に高い安定性があることが明らかになった。Table2は、ある小学校の1年から5年までの各学年1クラスの教師の7月と12月のそれぞれ連続する3授業を対象に、指名した児童の合計を月ごとに算出し、7月と12月で指名した児童の相関を算出したものである。すなわち、多くあて児童とあてない児童の差異が教師によってあると考えられる。このように教師は非常に高い安定性を有しており、この教

師の持つ非常に高い安定性が教師の教授行動授業の雰囲気に影響を与えている可能性があることが示唆された。

第5章では、授業を客観的にはかる指標として雰囲気に着目し、授業雰囲気の検討を行った。授業の雰囲気を評定

Table 1 あるクラスの教師発話の授業間相関

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
1日目					
2日目	.99**				
3日目	.98**	.98**			
4日目	.99**	.98**	.99**		
5日目	.97**	.97**	.99**	.99**	

注) **:p<.01

Table 2 7月と12月の教師の児童指名回数の相関

1年	2年	3年	4年	5年
.62**	.71**	.45**	.59**	.45**

注) **:p<.01

する際に、本論文では教師と児童以外の第三者が、授業ビデオを視聴してその授業の雰囲気を評定しているところに特徴がある。まず予備調査として、明らかに異なる印象を与える同学年、同教科、同単元を教える異なる教師の授業ビデオ (各授業5時限) を実験素材にし、授業雰囲気の探索的検討を行った。次に予備調査をもとに授業雰囲気尺度を作成し、尺度の信頼性・妥当性の検討を行った。さらに、作成した尺度を使用した授業雰囲気評定を学生と現役教師に実施し、評価者による授業雰囲気の認知の差異の検討を行った。これらの検討の結果、授業雰囲気が3因子 (「統制」的雰囲気、「自由・積極」的雰囲気、「喧騒」的雰囲気) である可能性が示され、3因子ともに、十分な信頼性も有していた。また、授業雰囲気の第三者による評価に一定の妥当性があることが明らかとなった。さらに、授業雰囲気の形成に教師の教授行動が関連していることが示された。また、同一評定者による2クラスの雰囲気評定の散布図 (相関) を、学生と現役教師で分けて検討を行った結果、授業雰囲気の認知に関しては評定するものの価値観が影響を及ぼしており、現役の教師と学生とは異なることも示唆された (Figure1, Figure 2)。

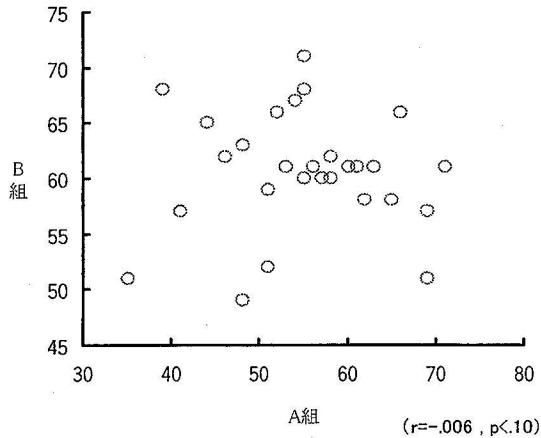


Figure 1 A組, B組の授業雰囲気評定の相関(教師)

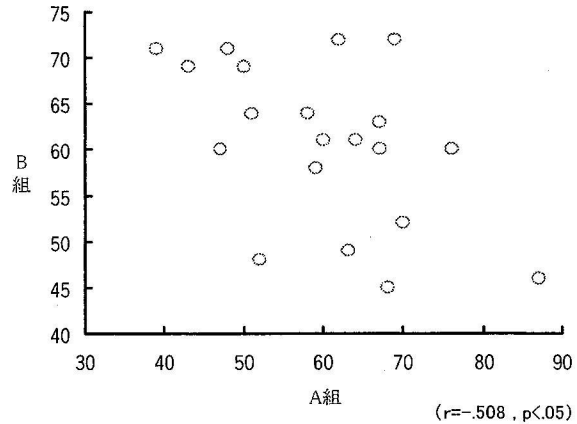


Figure 2 A組, B組の授業雰囲気評定の相関(学生)

第6章では、授業内での教師と児童の相互交渉の検討として、教師の児童への関わりの特徴を数量的・解釈的分析を行うことによって明らかにした。教師の児童への関わりとして本論文では、先行研究で指摘されている授業内発話の構造である「教師の働きかけ—児童の応答—教師の評価」をもとに、「教師の働きかけ」と「教師の評価」に分析の観点を絞って検討を行った。教師の児童への働きかけの特徴を明らかにするために、小学校2年の1クラスを対象に、授業中の教師が用いる児童への「指示・確認」の特徴を検討した。その結果、教師は「指示・確認」を多用することにより、児童との相互交渉の中で、授業自体をコントロールし、また、教師の発言に強制的意味合いを付与している可能性が示唆された。また教師の児童への評価に関して、教師の児童へのフィードバックの現状を数量的分析により明らかにした。その結果、教師は一斉授業の中では、結果の正否のみの伝達が殆どであり、その正否の伝え方に差異がある可能性が明らかになった。さらに、一斉授業の中の児童の予想外応答場面に着目して、予想外応答場面における教師の児童へのフィードバックの特徴を検討した。その際に、教師のフィードバックを児童への影響という観点からカテゴリーに分類し数量的分析を行うとともに、特徴的な事例を取り上げて解釈的分析を行った。検討の結果、数は決して多くはないものの、授業時間の制約等の物理的要因により、教師は児童にマイナスの影響を及ぼす可能性のあるフィードバックをする場合があることが明らかとなった。

第7章では、結論と提言を行った。以上の一連の研究により、日々の授業の中での教師の教授行動は、非常に高い安定性を有しており、この高い安定性が日々の授業に現れてくることが示唆されている。この教師の有する教授行動の非常に高い安定性は教師の固さと捉えることも可能であり、この固い教師の教授行動が、授業の雰囲気に影響を与

え、さらには、多様な児童の応答に対する非常に固い教師のフィードバックとして、児童にも影響を及ぼしている可能性が示唆できる。

本論文は、小学校で行われている一斉授業を連続的に観察したデータをもとに、実際に教育現場で日々行われている授業の構造を明らかにしたものである。このテーマは、実際の教育現場から授業が成立しないという授業崩壊の報告が多数なされている現状を考えると非常に重要な研究といえる。本論文の成果として以下の点が挙げられる。第一は、従来の授業研究の中心的関心が教師の授業方略や授業内のコミュニケーションルールであるのに対して、本論文では、実際の授業実践の場における教師の行動の特徴にその関心があり、日々繰り返し行われている一斉授業の中の教師の行動の記述を試みたところである。そのような観点到立つことによって、教師の持つ教授行動の固さを明らかにしたとともに、教師が、自らの授業を振り返る際の一つの手法にもつながると考えられる。第二は、授業を構成する構成員(教師・児童)とその構成員によって成立する授業という場を分けて考えることにより、従来の授業研究では、殆ど着目されることのなかった授業雰囲気に着目したことである。本論文では、授業を客観的に評価するため授業雰囲気尺度の作成を行っており、また、その尺度を用いた第三者による客観的な評価を行っている。教育現場に多くの深刻な問題が生起している現在、このような授業を客観的に評価する手法を確立することは、授業を評価する基準を考える上でも非常に重要なことであり高く評価できる。さらに、授業の第三者評価は今後、教育のアカウンタビリティの観点からも、非常に重要になってくると考えられる。